

## 序文

木田章義（京都大学名誉教授）

抄物の研究は広がりを持つようになり、その研究の方法も、利用目的も多彩になってきている。資料的な発見、公開も続いており、より詳細に諸本の成立も明らかにされている。文法的現象の時代的変遷についても、作成期間の長い抄物群は、長い射程をもっており、江戸時代との連続もあるし、鎌倉時代の資料の欠乏を補い、かろうじて平安時代とつなげられるところも出てきている。一方では抄物資料を通じて五山僧と博士家を含めた公家たち、あるいは旧仏教の僧侶や豊かな商人たちの間の学問的な交流の様子も窺えるようになっていく。語学的にも文化的にも抄物が切り開いた世界は広い。

そこにまた一冊、抄物の世界を拡げる山本佐和子氏の著書が刊行された。

山本佐和子氏は本書で、自らの抱く目的と方法に従って、語彙的研究、文法的研究、書誌的研究など幅広く分析されている。その目次を見れば、山本氏の研究の視野の広さが理解できるし、山本氏の興味の方角も分かる。対象とした語彙や語法についての分析や論述を見ると、それらの現象を解明した上で、その現象を国語史の流れの中に位置づけようとするひたむきさが感じられる。そのひたむきさが用例の博搜や先行文献の丁寧な追究、抄物以

外の資料の調査へと繋がっているようである。単なるこれまでの成果のまとめだけでなく、これからの発展の可能性を含んだ論文の集積である。

資料との巡り会いについても、山本氏は恵まれている。建仁寺両足院の資料の調査にも参加し、仁和寺の資料調査にも関わることができている研究者はほとんどいない。このような幸運な機会に巡り会うのも、研究者としての励みになっていくことと思う。両足院本『杜詩抄』や仁和寺本『古文真宝抄』の調査など、抄物研究者に有用な成果であり、抄物研究の発展を促すものである。

ところで、山本氏は抄物研究者の激減を嘆いておられるが、この感覚には世代の差があるようである。私の世代から見れば、抄物研究者の層は厚くなっていると感じられる。抄物専一に研究している研究者が目立たないだけで、文法研究でも、文化的研究でも、抄物とその周辺の知識は確実に広がり、正確に理解されるようになっていく。実際に山本氏の集めた用例や文法変化の流れの中の考察などは、私の世代では難しかったと感じられる。本書のよりに分析できるのも、明らかにされた事象の積み重ねがあるからである。五山僧の手になる抄物が、五山の世界で長く蓄積されてきた知識を背景にしていることも明らかになりつつあり、同時に彼等が抄物の原典となる漢詩文をどのような文献を用いて理解しようとしていたのかなど、かなり分厚い基礎的知識の集積がある。それは本書第Ⅳ部の論述に生かされている。

また、研究の方法は個人によって異なっていて良いし、研究姿勢もそれぞれのスタイルで良いと思う。山本氏が「付録」で提示しているのは一つの方法であり、必ずしも同じ過程を経て研究する必要はないだろう。例えば山本氏は、丁寧に用例を集め、読解し、資料としての性格を見極めているのであるから、まずは用例から論を立て、うまく整理できないところは先行文献を参照し、自己の意見が確定したあと、念入りに先行文献に当たって、意見を

調整するというやり方にすればもつと分かりやすい論文になると思われる。先行文献に対する配慮や敬意も必要であるが、何よりも論文は、読者に理解して貰うことを第一とする方が良いと思う。

年齢とともに知識や理解力が増してゆくので、次に論じる時には一層分かりやすい総合的記述ができるはずである。目の前に現れる疑問点を解き明かし、資料を丹念に分析し、考察している内に、ある時、高見に立っている自分を発見することになる。

本書によってこれまでの研究に一段落が付いたはずなので、次の世界へと進んでゆくことになるだろうが、どのような方向に、どのように展開してゆくのか、期待して見守りたい。

# 目次

序文	1	木田章義
〔凡例〕本書で引用する文献資料の扱い	17	
序章——抄物のことば・抄物という書物	1	
はじめに	1	
一 抄物の概要	2	
二 抄物の研究概況	9	
三 言語研究と資料研究を併行する意義	11	

## I 新シク型形容詞の派生

### 第一章 「きぶい(酷)」の語誌

一 問題の所在	19
二 「きぶい」の意味用法	21
三 「きびしい」との関わり	26
四 抄物以後の「きぶい」	32
まとめ	34

### 第二章 「いかめい」の語誌——「いかめしい」「いかい」との関わり——

一 問題の所在	39
二 「いかめしい」の意味用法	41
三 「いかめい」の意味用法	45
四 「いかい」の意味用法	48
五 「いかめい」と「いかめしい」「いかい」の関わり	50

まとめ……………55

第三章 新シク型形容詞の派生について——中世室町期におけるク活用形容詞からの派生を中心に——……………57

一 問題の所在……………57

二 ク活用形容詞からの派生……………58

三 他の品詞からの派生……………66

まとめ……………72

第四章 形容詞の活用型と意味分類——付「対象語」「形容詞文」……………77

はじめに……………77

一 「ク活用—属性」「シク活用—感情」説の変遷……………77

二 「主観的な感情」「客観的な属性」説の系譜……………81

三 形容詞の意味分類と「形容詞文」……………85

四 「形容詞文」とモダリティ……………88

今後の課題……………90

## II 語の変化と文法変化との交渉

### 第五章 「ツベイ」と「ツベシイ」——助動詞「ベシ」のシク活用化について——

はじめに……………

一 「ツベシ」の成立と展開……………

二 シク活用「ツベシイ」の形成……………

おわりに……………

### 第六章 モダリテイ形式「ラシイ」の成立

一 問題の所在……………

二 形容詞派生接辞「ラシイ」の特性……………

三 前接部分の形態的变化……………

四 初期の「活用語＋ラシイ」の特性……………

五 「名詞節＋ラシイ」の影響……………

おわりに……………

第七章	中世室町期における「ゲナ」の意味・用法——モダリテイ形式「ゲナ」の成立再考——	139
一	問題の所在	139
二	モダリテイ「本体把握」「推定」	140
三	抄物における意味・用法	142
四	派生接辞の史的变化	150
五	まとめと今後の課題——モダリテイ形式の成立再考	157
第八章	モダリテイ形式「サウナ」ソウダ」再考——名詞に後接する用法をめぐって——	161
	はじめに	161
一	「サウナ」に関する先行研究	163
二	名詞に後接する用法の変遷	169
三	「サウナ」の史的变化——変化における「名詞＋サウナ」の位置づけ	177
	まとめと今後の課題	180



一 問題の所在	183
二 本動詞「ねまる」	185
三 補助動詞用法「テネマル」	187
四 「ねまる〈存在〉」と「テネマル」の広がり	191
五 補助動詞用法成立の要因	193
おわりに	195

### III 抄物の史的展開

第一〇章 建仁寺両足院蔵「杜詩抄」の成立をめぐって——抄物と室町期の文化試論——	203
はじめに	203
一 両足院蔵「杜詩抄」の概要	204
二 内容、言語上の特徴	208
三 「杜詩抄」の作成者	210

四 仮名抄と室町期の文化 ..... 213  
おわりに ..... 217

第一章 「杜詩抄」の文末表現「〜ヂャ」について ..... 221

はじめに ..... 221

一 文末表現「〜ヂャ」の分布と「杜詩抄」の先行抄 ..... 222

二 文末「〜ヂャ」に関する先行研究 ..... 226

三 「杜詩抄」における文末表現「〜ヂャ」 ..... 229

四 文末表現「〜ヂャ」が用いられる理由 ..... 238

おわりに ..... 242

第二章 五山・博士家系抄物における濁音形〈候〉について ..... 245

はじめに ..... 245

一 問題の所在 ..... 246

二 濁音形の認定 ..... 248

三 「杜詩抄」における「ゾウ」の使用状況 ..... 251

四	五山・博士家系抄物における〈候〉	255
五	濁音形〈候〉の史的変遷	259
	おわりに	261

第一章	中世室町期の注釈書における「トナリ」の用法	265
-----	-----------------------	-----

	はじめに	265
一	問題の所在	266
二	「トナリ」に関する問題と先行研究	267
三	和書の注釈書における「トナリ」	275
四	注釈書における定型表現「トナリ」の機能	282
	おわりに	284

#### IV 抄物研究の可能性

第一四章	「彭叔守仙抄古文真宝抄」の諸本について——大名高家が求めた仮名抄——	289
------	------------------------------------	-----

はじめに……………	289
一 「古文真宝」とその抄物……………	290
二 「彭叔守仙抄」の成立について……………	291
三 作成に関わった人々——彭叔守仙と畠山義総……………	296
四 「彭叔守仙抄」の内容と文体の特徴……………	299
五 「彭叔守仙抄」の受容について……………	304
六 「古文真宝後集」と「古文真宝抄」の発行をめぐる……………	306
まとめと今後の課題……………	307
<b>第一章 大阪府立中之島図書館蔵</b>	
『増刊校正王状元集註分類』東坡先生詩』の書誌的考察・翻刻	
——東坡詩の抄物の受容と展開の一例——……………	313
一 書誌的考察……………	313
はじめに……………	313
一・一 書誌……………	314
一・二 先行研究——本資料と「四河入海」の関係……………	316
一・三 本資料の現状……………	319
おわりに……………	328
二 翻刻……………	331

「古則聞書零本」解題・翻刻

一 解題

一・一 書誌……………345

一・二 解説……………346

今後の課題……………352

二 翻刻

終章 「私抄」と称する抄物について

「私抄」と称する抄物……………378

抄物と中世室町期の「私」……………380

他者による抄物・私による抄物……………381

使用したテキスト……………

参考文献……………

〔付録〕抄物の利用法——抄物による言語研究の継承と展開——

はじめに——深刻な「抄物アレルギー」の実態……………

一 日本語史資料としての「抄物の取扱説明書」……………

二	口語資料としての研究史	423
三	抄物を資料とした言語研究の事例	430
	おわりに	434
	あとがき	441
	索引	452

(左開き)

## 序 章——抄物のことば・抄物という書物

### はじめに

本書は、中世室町期の「抄物」の言語を対象として、次の二点から考察を行う。ひとつは、抄物に見られる言語現象を手がかりに、一五世紀後半から一六世紀にかけての日本語や、古代から現代にいたる日本語の史的変遷を考察するものである。もうひとつは、抄物がどのように作成・享受されたのか、言語から抄物の歴史的・文化的背景を考察するものである。

従来、抄物は、キリシタン資料・狂言台本と共に「室町期の三大口語資料」とされ、主に日本語の歴史的変化するを観察する際の資料として用いられてきた。本書の前半は、明治末に始まり平成半ばまで盛んだった、抄物を主たる資料とした語詞・語法の研究に連なるもので、昭和四〇年代から平成はじめにかけて言語研究用に整備された抄物の複製・影印を用いた日本語史研究である。<sup>(1)</sup>

一方で、近年、抄物は、日本語史資料に留まらず、文学や歴史の研究でも注目されることが増えている。また、日本語史研究でも、「役割語」理論（金水二〇〇三・二〇〇八）など、言語資料となる文献の作為性への注意が改められて促されているほか、中央語―標準語の史的变化を単線的に捉えるだけでなく、現在方言や各時代の言語変種に

# 第一章 「きぶい」(酷)の語誌

## 一 問題の所在

抄物が語史・語彙史の研究資料として有用であることは、抄物に言語資料としての価値を見出した新村(一九〇五)で夙に言及され、抄物を主たる資料とした言語研究の嚆矢である寿岳(一九五四・一九五五)や亀井(一九五七)でも、他の文献資料には見られない派生語や俗語が取り上げられている。

寿岳(一九五五)は、中古から中世への形容詞の語彙的変遷を考察し、中世語の特徴として、派生語が元の語(語基)と共存する「語の乱立」を指摘している。その中の一つが、ク活用・シク活用の両方の活用をしたように見える形容詞が存する現象である。寿岳論文は、ク活用形容詞がシク活用する「二次的シイ型」が抄物に多いことを述べるに留まるが、のちの研究で、その逆方向、シク活用形容詞がク活用しているように見える語も見いだされたため、この現象は「両活用形容詞」と呼ばれるようになった。後者の一例が、次の「きぶい」というク活用形容詞である。

- (1) a. 母ハ愛シテナニ事モ云マ、ニスルソ。テ、ハヤウダイツガウヒヤウシニハシカリキフイホドニナツカヌソ。

(玉塵抄・二〇31ウ)



## 第二章 「いかめい」の語誌

——「いかめしい」「いかい」との関わり——

### 一 問題の所在

中世室町期の抄物には、次のような「いかめい」という語が見られる。

(1) a. 豈不賢乎哉ハ賢ト云ハ聖賢之賢ノ心テハナイソ。只嗚乎イカメイ者カナト云心ソ。

(史記桃源抄・一二15オ)

b. 公之功多矣トハ白起カ功ノイカメイ事ヨ。

(史記桃源抄・二143オ)

c. サテ黄河モイカメイモノナレトモ泰山ノ天門ヨリ見レハ帯ホトナソ。

(四河入海・一三ノ四7ウ)

「いかめい」という語は、出現する文献資料が抄物に限られている。そのことを根拠に、この語もまた、「きぶい」と同様、シク活用形容詞の「いかめしい」が口語においてク活用したものだと言指摘されてきた。

このような指摘は、早く山田(一九五三)に見られる。その後、鈴木(一九六五・一九八七)、柳田(一九八一)、村田(二〇〇五)において、一部の形容詞が本来と異なった活用をする現象の一つとして取り上げられてきた。村田論文は、「きぶい」と「いかめい」は共に、「新しく生まれた語形が好まれる」口語で用いられたものとし、「い

### 第三章 新シク型形容詞の派生について

——中世室町期におけるク活用形容詞からの派生を中心に——

#### 一 問題の所在

中世室町期に、次のような語が見られる。

(1) a. 谷カ詩ハ器ニトラハフルシイ疊ニ古ノ篆字ヲホリツケタヲ見ヤウナソ。

(癸未版錦繡段抄・三40オ)

b. 嶮 路崎―〔嶮〕也。ミチノケワシクアヤウシイナリ。

(玉麈抄・一四84オ)

c. おぬし達がいかひかほしたりと、ふかしひ事はあるまひぞ。

(虎明本狂言・あわせ柿)

この「フルシイ」「アヤウシイ」「ふかしひ」は、それぞれ形容詞「古い」「危うい」「深い」から派生してできた語と考えられる。このような語については、早くに山田（一九五三）、寿岳（一九五五）に指摘があり、本来ク活用である「古い」「危うい」などが、シク活用化したものとされてきた。

従来、これらの「二次的シイ型」「両活用形容詞」「ク活用形容詞のシク活用化」と呼ばれる語群の発生は、形容詞の活用型と意味との対応関係と関わりがある現象と考えられている。対応関係とは、石井（一九五五）、山本（一九五五）によって指摘されるような「シク活用―感情」「ク活用―属性」というものである。この指摘を検証する

## 第四章 形容詞の活用型と意味分類——付「対象語」「形容詞文」

### はじめに

第三章の新シク型形容詞の派生現象の検討を通じて、古典語の形容詞の二種類の活用型（ク活用・シク活用）と対応する意味の特徴の一端を明らかにできたように思う。日本語の動詞では、或る活用型が特定の文法的意味や語彙的意味と対応しているといった、活用型と意味との関係は認められない。この対応関係は、形容詞という品詞に特徴的なものである。以下、本章では、この形態の特徴と意味との対応に関する研究史を整理し、それを手がかりに、形容詞の意味分類や文法的性格について考えてみたい。

#### 一 「ク活用―属性」「シク活用―感情」説の変遷

古典語の形容詞には次の二種類の活用型がある。所謂、学校文法の「活用表」を次頁に《表1》として掲げる。このような活用の把握は、近世以来のものである。<sup>1)</sup>活用語尾を「く・く・し・き・けれ」と「しく・しく・し・しき・しけれ」のように取り出すところから、前者は「ク活用」、後者は「シク活用」と呼ばれてきた。

## 第五章 「ツベイ」と「ツベシイ」

### ——助動詞「ベシ」のシク活用化について——

#### はじめに

古典語の助動詞「ベシ」は本来、ク活用形容詞と同じ活用をする。しかし、中世室町期には次のようにシク活用化した例が見られる。

- (1) a. 燕雀ハ人ニ馴レ近キ者チヤホトニ設テモトリツヘシイソ。  
 【及<sup>ヒ</sup>廢<sup>セラルニ</sup>、門外可<sup>レ</sup>設<sup>ク</sup>雀羅<sup>ヲ</sup>】  
 (史記桃源抄・一四87オ)

b. 季倫ハ豪傑ナル程ニ泣ツヘシウハナイソ。  
 (四河入海・八ノ三12オ)

「ベシ」のシク活用化については、大塚(二九六〇・一九九五)の助動詞「マイ」の成立との対応説が知られている。「マイ」は、「ベシ」の否定を表す「マジ」が変化したものである。大塚では、「マジ」と「ベシ」は連体形終止の一般化とイ音便化を経て「マジイ」「ベイ」となったのち、互いに影響し合って「マジイ」から「マイ」、「ベイ」から「ベシイ」が生じて、二つの語形で用いられたとされている。

しかしながら、シク活用化した「ベシ」において注意すべきは、ほぼ全例が(1)に掲げたように、助動詞「ツ」が

## 第六章 モダリテイ形式「ラシイ」の成立

### 一 問題の所在

形容詞を派生する接尾辞「ラシイ」は、中世室町期から用いられるようになったものである（寿岳一九五五）。室町期に認められる形容詞「くらしイ」の例、「ばけらしい」「じちらしい」の使用例を掲げる。

(1) a. 全体ハ鳥テモノヲ云ハ人ノ様ナハアマリハケラシイソ。身ニハ毛羽ナントカアリテ首ハ人ノ面チャト云タ  
ハヨサウナソ。  
(史記桃源抄・三六<sup>(1)</sup>才)

b. Ichiraxij. I, Ichina mono. ジチラシイ。または、ジチナモノ（実らしい。または、実な者）例、Mono mōsu  
yōdamo jichiraxij. (物申す様体も実らしい) 話しぶりでも、重厚誠実であることが認められる。

(邦訳日葡辞書・三六〇頁)

現代共通語の「推量」を表すモダリテイ形式「ラシイ」は、この接辞が変化したものといわれている。本章では、接辞「ラシイ」が、どのようにモダリテイ形式としての用法を獲得していくのかを考察する。

従来、接辞からモダリテイ形式への変化で特に注目されてきたのが、接辞では、(1)のように、前接要素が名詞や形容動詞語幹に限られるのに対し、モダリテイ形式になると、次の(2)のように、動詞など活用語の終止・連体形に

## 第七章 中世室町期における「ゲナ」の意味・用法

——モダリテイ形式「ゲナ」の成立再考——

### 一 問題の所在

室町期の抄物で、活用語の終止・連体形に後接して推量を表す「ゲナ」が広く用いられることは、湯沢（一九二九）で指摘されて以来、多くの研究がなされてきた（土井一九三八、佐田一九七二、仙波一九七六、青木博二〇〇七、山田二〇一四など）。

(1) a. ヤレ杜鵑ハ吾カ心中ヲ知テ不如婦トナクゲナヨ。

（中華若木詩抄・整版上42ウ・湯沢一九二九）

b. 爰ニ白鷗ヤ鶯ヤナンドガ有ウス処デアルガ、人近ナホドニナイゲナゾ。

（丁亥版山谷抄・一四35ウ・山田二〇一〇）

c. 言語道断、面白景ソ。推量スルニ、是ハ天カ我ニ詩ヲツクラセウトテ、カウアルゲナソ。

（四河入海・九ノ一5ウ）

これらの「ゲナ」が表す「推量」について、先行研究では、「述べられる事物を主として客観的に言えば状態、（中略）主観的には推量の意を示す」（湯沢一九二九・三六六頁）、「確かな根拠に基づく推量」（仙波一九七六）などと

## 第八章 モダリテイ形式「サウナ」の再考

——名詞に後接する用法をめぐって——

### はじめに

現代共通語「ソウダ」につながる「サウナ」が、初めて文献上に見られるのは中世室町期である（湯沢一九二九、土井一九三八等）。「サウナ」の歴史的変遷については、現代語「ソウダ」がいわゆる助動詞には珍しく、動詞の連用形や形容詞語幹に後接して様態・推定を表し、活用語の終止・連体形に後接して伝聞を表すという二種類の用法を持つこと、加えて、近世以前には活用語の終止・連体形に後接した場合にも様態・推定を表していたという史の変遷の特異性から、これまで多くの研究がなされてきた（佐田一九七二、仙波一九七六、宮地一九七九・一九八八、円井一九八四、早野一九八六、山内一九八九、中本一九九六、岡部二〇〇〇・二〇〇二、鈴木二〇〇二、山口二〇〇三、漆谷二〇一〇、山田二〇一四等）。

本章で着目したいのは、「サウナ」が名詞に後接する用法である。抄物では、初期の「史記桃源抄」から、後期の「玉塵抄」まで広く例が認められる。

(1) a. 撓ト曲トハヨツホト同コトサウナソ。

（史記桃源抄・一五三4オ）

## 第九章 中世室町期における「ねまる」の意味・用法

### 一 問題の所在

中世室町期の抄物には、次のような「ねまる」という語が見られる。

(1) a. 我カ家ニハ竈ノ火タイテフスホリカヘツテ、盆瓶ヲ洗<sub>ハ</sub>テネマル婦女ノアルマテソ。

(四河入海・一九ノ一26オ)

b. 大名ハ一度ノ食事ニ、万錢ヲツイヤシテモマタ、箸ヲ下スニ処ナイト云テネマルソ。(湯山聯句抄・73オ)

c. 我モ子由モ去京十年ハカリ天一隅ノ外国ニネマルソ。(四河入海・一六ノ二32オ)

「ねまる」は、近世の文学作品に見られる俚言・俗語として、比較的よく知られている。これは、(2)の「奥の細道」の一句に使用されたことが大きい。

(2) 涼しさを我宿にしてねまる也

(奥の細道・尾花沢)

(3) a. 大星ゆらの介殿と云は此屋たいにねまりめさるか。

(近松浄瑠璃・碁盤太平記・中村一九四八)

b. 女郎と契らぬ旅人には 夜着も借さいで寺泊 おくたびれならねまるべいとて わさゝの酒を強めざ

かい

(歌謡集・松の葉二「色香」・湯沢一九四三)



## 第一〇章 建仁寺両足院蔵「杜詩抄」の成立をめぐる

### ——抄物と室町期の文化試論——

#### はじめに

室町期の抄物、キリシタン資料、狂言台本は、当期の「三大口語資料」と称されるように、当時の話しことば（音声言語）をよく反映していると考えられている。これらのうち、キリシタン資料や狂言台本は、作られた当時の話しことばを反映していることが比較的理解しやすい。キリシタン資料には、外国人宣教師が布教活動に必要な日本語を学習した書物が多数含まれる。また、狂言は、曲目の多くが当時の風俗を題材とした、いわば現代劇であり、台詞にも当時の言語が用いられているとみるのが自然である<sup>1)</sup>。

一方で、抄物は、口頭での講義に関連して成立したものとはいえ、話しことばを用いる必然性は低い。講義内容の記録だけが目的なら、現代の学生がとるノートのように、要点を列挙するという方法も可能だったはずだからである。実際、口語的な抄物は、作成者や作られた時期が限られることも指摘されている（大塚一九七七、柳田一九九八）。

本章から始まる第Ⅲ部では、抄物の中から、林宗二（明応七（1498）〜天正九（1581））が最晩年に書写した唐代

## 第一章 「杜詩抄」の文末表現「〱ヂヤ」について

### はじめに

中世室町期の五山において杜甫の詩が盛んに読まれ、多くの僧によって杜詩講釈が行われたことは、僧の個人文集や日記によって知られる（芳賀一九四五・一九五六）。しかし、杜詩講釈の内容を伝える抄物で、現在、原典の全巻の注釈が揃う形で所在が知られているのは、共に建仁寺兩足院に所蔵される「杜詩統翠抄」「杜詩抄」の二種のみである。

このうち、「杜詩統翠抄」は、抄物の中でも成立時期の早いものとして、日本語史資料として参看されることも多い（『統抄物資料集成』所収）。もう一方の「杜詩抄」は、早くから存在が知られながら、編纂者の林宗二自筆本である兩足院蔵本の乱筆と破損の具合が大きいこともあり、言語面の調査は進んで来なかった。第一〇章では、「杜詩抄」の成立について、従来知られてきた雪嶺永瑾講の聞書抄ではなく、林宗二が中心となって複数の先行抄物を編纂した抄物（集成抄物）であることを述べた。

兩足院蔵「杜詩抄」（以下、「杜詩抄」）では、五山・博士家系抄物では稀な文末表現が見られる。

(1) 南極一〔青山衆〕 夔一〔州〕 テハ山カ多チヤ。荒一〔戊〕 人トマリソウ。歳一〔月蛇見常〕 夔一〔州〕 方ハ気

## 第二二章 五山・博士家系抄物における濁音形〈候〉について

### はじめに

建仁寺両足院所蔵「杜詩抄」〔二〇巻二五冊、元龜元（1570）→天正九（1581）年写〕（以下、「杜詩抄」）では、五山・博士家系抄物では稀な文末表現が散見される。次の「ソウ」も、そのひとつである。

(1) a. 「閑ニ雜談申セフスレトモ、チツト隙ノ事カソウホトニ、イカサマ重テマイリソウ」ト云テ (一一六才)

b. 才人ハ女官ソウ。 (一六坤39ウ)

c. 幾一〔処起漁樵〕夔州ノテイソウ。 (一六乾61ウ)

(1) a では、「隙の事がソウ（お暇乞いが必要な用事がある）」のように「ソウ」が存在（ある）を表し、続く「重ねて参りソウ（また参ります）」では、活用語連用形に「ソウ」が付いている。「ソウ」は所謂、丁寧語「サウラフ」の一語形であると考えられる。

しかし、「杜詩抄」では、(1) a のようなものより、(1) b 「女官ソウ」、(1) c 「テイ（体）ソウ」のように、「ソウ」が名詞に直接付く例が多い。「サウラフ」には、第一音節が濁音になった「ザウラフ」などの形で体言に直接付く用法があることが指摘されている（湯沢一九四二、富倉一九五五等）。本章では、「杜詩抄」の「ソウ（ソウ）」

## 第一三章 中世室町期の注釈書における「トナリ」の用法

### はじめに

建仁寺両足院蔵「杜詩抄」には、五山・博士家系の仮名抄では稀な文末表現が認められる。本書第一一、一二章では、(1)のような「ヂャ」や「ゾウ〈候〉」について報告した。

(1) a. 来一「書細作行」サリナカラ書ヲクレウトキハ、ネンコロニカイテクレイチャ。  
(杜詩抄・一二72ウ)

b. 繫舟一「身万里」甫カナリソウ。  
(杜詩抄・一七84オ)

「ヂャ」「ゾウ〈候〉」は当代の口語的な繫辞と考えられ、「杜詩抄」では、後半の卷一一以降で、仮名抄の「ゾ」「ナリ」に相当する用法で用いられている。

本章では、次のような「トナリ」に注目したい。

(2) a. 蘇源明トノハ去モノトヲ知りサウタホドニ、酒錢ホトノ事ハ御扶持ソロヘト也。  
(杜詩抄・二坤26オ)

b. 是ホトノ才士ナケレトモチツトケカラシタ。竜ノケツマツキチャ。失カ失テモナイ。今度ハ一定及第セント也。  
(杜詩抄・二坤24オ)

「トナリ」は、(2) a のように原典の登場人物の発話として解釈したあとに用いられる。また、(2) b のように、当

## 第一四章 「彭叔守仙抄古文真宝抄」の諸本について

——大名高家が求めた仮名抄——

### はじめに

ここからの第IV部では、伝本の書誌学的・文献学的調査によって、作成の経緯や目的、さらには受容者やその利用目的が推定できる抄物を見ていく。各章で取り上げた抄物は、それぞれ作成・享受の様相が著しく異なる。本抄の「彭叔守仙抄古文真宝抄」は一人の上層武家の依頼で五山僧が作成したもの、第一五章の大坂府立中之島図書館蔵元刊本〔増刊校正王状元集註分類〕東坡先生詩〕は五山僧が師説の伝授の証しとして原典に抄文を書入れた「書入れ仮名抄」、第一六章の寿岳文庫蔵「古則聞書零本」は林下の若年の僧侶による密参録に関する聞書である。

第三部で扱った建仁寺両足院蔵「杜詩抄」について、和漢聯句に関わる需要を推定したように（本書第一〇章）、抄物の文化的・社会的背景の把握は、日本語の史的変遷の解明において、抄物の言語事象を適切に参照するために欠かせない。本書では未だ、外堀を埋めるような考察に留まるが、抄物の資料的性格の解明の一助としたい。

## 第一章 大阪府立中之島図書館蔵

『増刊校正王状元集註分類』東坡先生詩』の書誌的考察・翻刻

——東坡詩の抄物の受容と展開の一例——

### 一 書誌的考察

はじめに

大阪府立中之島図書館蔵『増刊校正王状元集註分類』東坡先生詩』（全二五卷二八冊）は、蘇軾（字子瞻、号東坡、1037～1101）の詩（東坡詩）の諸本・諸注の中で最も流布した「王状元集註本」の元代の刊本であり、日本に齎された後、五山寺院内で訓点とカタカナによる注釈が稠密に書き入れられた本（書入れ仮名抄）である。

当該資料は、漢籍受容や抄物の研究で従来から言及されているが、必ずしも注目されてきたわけではない。<sup>(1)</sup>「王状元集註本」は宋代に版行されたもので、日本にも宋版が伝存する。本書は元代に下るもので、民間の書肆が版行した坊刻本である（西野一九六四）。また、抄物のうち、原典に抄文を直接書きこむ「書入れ仮名抄」（柳田一九九八）の一つだが、書き入れられた抄文は、先行する著名な東坡詩の抄物「四河入海」の記述を出るものではないという指摘がある（堀川二〇一五）。<sup>(2)</sup>

## 第一六章 京都大学文学研究科図書館寿岳文庫蔵

### 「古則聞書零本」解題・翻刻

#### 一 解題

##### 一・一 書誌

資料名 「古則聞書零本」(内容による仮題) 元和八(一六二二)年写 存一冊(元は二冊か)  
京都大学文学研究科図書館所蔵(請求記号: 国文=寿岳文庫Ⅱc116)。

種類 禅籍抄物(密参録)

表紙 原装本文共紙表紙

法量 二三・七×一七・七cm

装定・料紙 袋綴仮綴、楮紙

外題 なし ※表紙左端に「古派／喝堂乾」とある

内題 なし

丁数 一五丁(墨付一三・五丁)

## 終章 「私抄」と称する抄物について

国語学の研究者が、言語研究資料としての抄物の研究を始めてから百年以上が経過している。それでも、筆者が抄物の資料研究を継承していくことが必要だと感じたのは、個人的な経験ではあるが、本書第Ⅰ部、第Ⅱ部の元となった卒業論文から博士論文までの言語事象の記述を進める中であつた。抄物間の言語差は、一語一形式をとつても、各抄の成立時期のみでは説明できないことが多い。また、後期抄物とされる「玉塵抄」「詩学大成抄」の調査結果は、作為性を感じるくらい説明しやしいのである。後者に関して、山田潔『玉塵抄の語法』（二〇〇六年、清文堂出版）では、「玉塵抄」について「その語法において、かなり明確な規範性を見出すことができる」と指摘されている。筆者の調査でも、「玉塵抄」は特に口語的・通俗的な語彙の意味用法において等質的で、例えば、桃源瑞仙の抄物で用いられる通俗的な語彙を、俗になりすぎない意味用法で意識的に取り入れていた印象さえ受ける。

序章で触れた抄物の言語資料としての性格——抄物に反映される言語の性格を考えるうえで、第Ⅲ、Ⅳ部で取りあげたような作成経緯や受容の様相の手がかりが残る抄物の把握は欠かせない。これらの抄物は、従来から存在を知られていたものの、口語資料としては注目されなかつたため、言語研究や書誌的・文献学的研究が進んでこなかつた経緯がある。



## 〔付録〕抄物の利用法<sup>①</sup>

### ——抄物による言語研究の継承と展開——

#### はじめに——深刻な「抄物アレルギー」の実態

私は、文法史や語史を通史的に観察している大学教員の知人から、次のような質問を受けることがあります。

a. 「抄物ってどれから見ればいいの?」

b. 「抄物を調査する人って、抄物を読んでいるんですか?」

こういう質問が出てくるのには、次のような背景があると思われます。bなども、決して馬鹿にされているわけではないと思います。まず、aの質問が出る経緯は次のようなものです。

①自分が調べている言語事象（音韻史、表記史、語史、文法史、等）について、中世末期の状況も確かめたいと考える。

②柳田征司『日本語の歴史4 抄物、広大な沃野』（武蔵野書院、二〇一三年）を読む。挙げられている抄物のどれを調査したらよいか、分からなくなる。

③柳田征司『室町時代語資料としての抄物の研究 上・下』（武蔵野書院、一九九八年）を開く。余計分からなく